

當世利口女

全



特56

799

027373-000-2

特56-799

当世利口女

服部 孝三郎/著

M6

ADJ-0132





第一部 服部氏 著 記

第五号 當世

利口

女

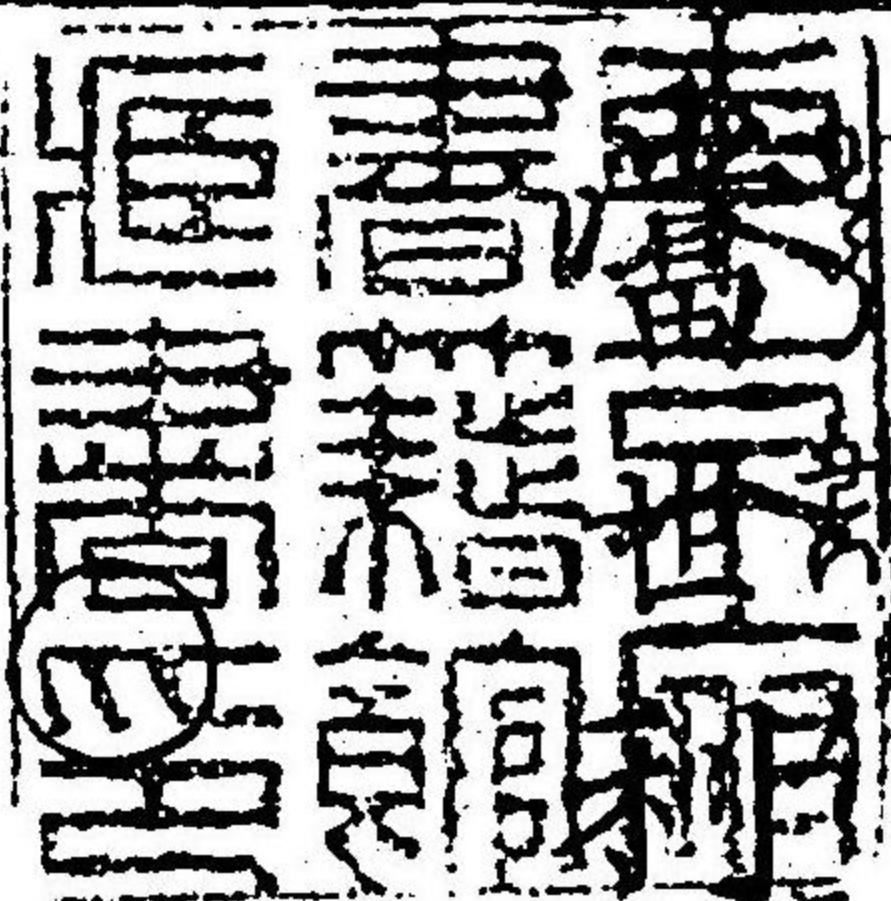
第四号 伊五 一本



價目表

定價壹分六分





利口女

万亭 服部孝三郎著

童々日本の泰平の御代に生て物讀書のまをさ  
老らぬ身で某の妻とおまて眉を刺齒を漆一か  
此項珍ら一きことを見聞せ一ありぬ。女の眉毛  
とを糸と齒を漆るを。のふ譬て戒一冊紙を見  
一か。たつぬ身ふて他の是非をりぬとありさ  
由愛國の為まこの戒ふぬ身由一ありとありさ

眉毛と家赤か笑へばく好くさ

耳綴と顔の網かきりよけ

造物主男ふくぬ乳とよの

女ふ附よ三ツ子とあり

日本 利口女



昔能因といふ歌よき名所の歌をふと考ぐべし此を  
 を家ありて披露して其情薄しとをきよる旅枕に  
 出つしうら。家お籠りて毎日窓より首をさぐりし  
 顔を日に黒免つ。やがて旅より戻りて躰にて  
 ○おとが産とたふ出いりて秋風ぞふふあつ川の  
 関といふ歌と披露せしむる顔の垢つたふあつ  
 見り人君と能因いあつて垢入ると笑ひしとの  
 物語りいりてをきとあつて違へども其眉と齒の  
 世上お私めんとエ一人己妻おふらび春霞の眉を

おうせ。う金の齒を雪の白齒お磨せらるる風の風説  
 あり。かの歌よきの顔を黒めりといひあつて他を示に  
 自より改るゝ當然のとかりあつて后世上へ私め  
 冊紙の趣意の要を摘むいせん。その西洋人の説に  
 眉毛の麗く齒の白さを婦人の面色を飾るゝめ  
 造物主の持お意を用ひりなり殊お眉毛  
 の面の飾のゝるゝ光線の過劇を防ぐゝめ  
 具より人お眉毛をさるとた々大陽の光線を上より  
 直お目お受て眼病の原因とあつると多し故に



熱帯寒帯の土地の濃薄あり斯ま  
造物主の深き趣意の眉ありと云  
此説の  
西洋人の吐出せしや心智開明の時  
るれども  
如きなりぬ身に聞かるを更に合か點てんゆべ  
仰天の覆おひ地の限りの大世界の國々數多し  
其國々の旋風俗ま由萬國もいり多くば茲こゝに座ざ  
禮義ありて一いつあも立たち禮義あり其外そ替かへること  
さらにあり譬たとへを兩眼りゅうがんの國この人ひと一いち眼がんの國こありらば  
かことといをえんその一眼いちがんの國この人ひと兩眼りゅうがんの國こありらば

かこといことをいせんさきをいふかことゆ  
かこといぬゆかことある國と云ふことあり  
や日本の妻室の古より眉を刺齒と染つく私わたしども  
けうべ國の風俗ふうぞくに定まりん今日こんにちに至いたるまで眉まゆあり  
女巨満おんなこゝろありとも眉無まゆなとめめ眼めと目めかやくとて育そ  
目めとかりかり者ものゆるく眉まゆありて眼めが痛いたむ  
このをい聞きざとを今更いまさら西洋の利辯りべんあり愛草あいそう  
まの業わざありとも今いままま痛いたまぬ眼めが今いまより痛いた  
ゆせまあり類るいありことあり諸人しよじんのううむむ良よの



西洋人



西洋人  
日本の地  
居留  
面頬要具の  
髪と刺

「日本の地」  
「居留」  
「面頬要具」  
「髪と刺」

家作の庇を放  
雨雲の害あり  
目前あり  
眼の庇と  
刺し女の  
数多  
おまじゆ  
そのあふ盲目と  
まき眼の痛むと  
古来よりきき聞ば



「大陽の光刺と  
防ぐ眉毛と附る男」  
おまじゆ  
まき眼

おまじゆ  
まき眼



脂ヤブを喰くふをさりのきぬど煙けりのうちふる其脂ヤブ籠かごの  
 と常じょうに吸すへどつのみ害がいまさをしととととが西洋せいやうの人  
 已おが國くにの風俗ふうぞくをりて他國たこくの風俗ふうぞくの是非せいひとりて  
 ことなりれりか日本にほんの人情にんじやうのととと造物主ぞうぶつしゆの産付うみ  
 ことなりて其年ねん  
 配まふようて美みとも見みへ醜みにくもありさとい衣い装さうでさる  
 幼おお似合あり長年ちやうねんお似合あり老年らうねんお似合あり  
 其ま人ひと柄がらおようて似合にあとおあらる緞色じやく目めある  
 の書面しよめんの上の論ろんおあらるび今いまそのとめりお離がれ

顔かほへ眉まゆをおき三つとらむ老おを白齒はをとと  
 として化物やぶと見みる者ものあらるしゆいうべ美人びよんと見みるあらる  
 あらんやさく造物主ぞうぶつしゆ熱帶ねつたい寒帶かんたいの土地とちおようて眉まゆ  
 毛けの濃こき薄きを附属ぶぞくとらるがおある度の裁さい  
 國中こくちゆうお濃薄こき眉あらるを見みて知しるべしそとも  
 あらる眉毛げの刺そねが元もとの如ごとく齒も磨けが白しろく  
 何時いつ改あるゆまるといはるの女藝者おんなぎしやの新造しんぞう顔かほ  
 由よし翌日あすの内儀うちぎの年間ねんかん顔かほとなり又日ひあらる内  
 儀ぎ顔かほお眉をはる齒を磨めて二度にど三度さんどの持もちお出で



るも安々まども外國がうごくのいは是これよりも甚よましき業わざのり  
そも天てんの産うまつけぬ金環きんわんを耳みみへためて父母ふぼれ行さ  
身の身み躰たうへ疵きずをつけたと耳みみの輪わを取とりて疵きず  
の痕あと生涯しやうがい小癒いひつことありそれと身み小害がひゆるり  
とが國くにの風俗ふうぞくとま。その外あ造物さうぶつ主ぬしの生う付けし馬うまの  
囊きんの玉たまえ人ひと知ち小接け取とり騎兵きへい或ある馬車ばしや小驅使くし  
まろふその身み小害がひるく業わざ小利りあるを見みればるんぞや  
人の肩毛かたげと刺さを天てんの罪人ざいじんといひや誠まこと小他國たこくの善事ぜんじ  
及び食物あじふ機械きか等らを受うる者ものハ已おれ其利そのり害がひと試あして

考かうしてのう人ひと施行せしやうを不ふを識者しきやとゆりへさゆなく  
是これ由よし西洋せいやうあはし西洋せいやうと西洋せいやうの二字ふたご小あざされん  
得意とくい小教かへみちびく宝貨ほうか小費ひあるのこおらば  
一人ひとりの虚きよを萬人まんねん実まこと小傳でんふ既すで小是これ等らのこと西洋せいやう  
人ひと由よし諭語ごんごあり○新聞雜誌しんぶん七十六号しちじゅうろくごう 此外そのほか珉しんら一いつ  
こととま多おほく聞きとりとどゆが國くにのこととま百ひゃくが一いつ  
と学まなゆせば殊こと小外國がいこくへも渡わたらばより渡わたれが  
とて生國せいこくの事ことえ一いつ生せい小の学がくぐとま身みをるんぞ  
五年ごねんや七年しちねん彼かの地ち小あれたとて其地そのちのことを



よく学び得難きりる國不在留する他國人を  
かゝることなり。余暇あるはまじりゆりふことあること  
まづあるを女の身ふかす眉と齒のことなり  
りつゝの意に謬あるを誰かて由教へてらまよ  
王土に住身の政府に出るの何等も是非といはん  
さるる私として國の風俗に恃り世上の普通  
に異なる者けりる渠こを反て吾國のかとて  
とまじり思ふぞ穴賢  
當世利口むき免終

當世利口女  
新勢 兎美談語

服部氏 著  
万亭應賀 著

明治六年三月

書肆

山寄屋清七



